

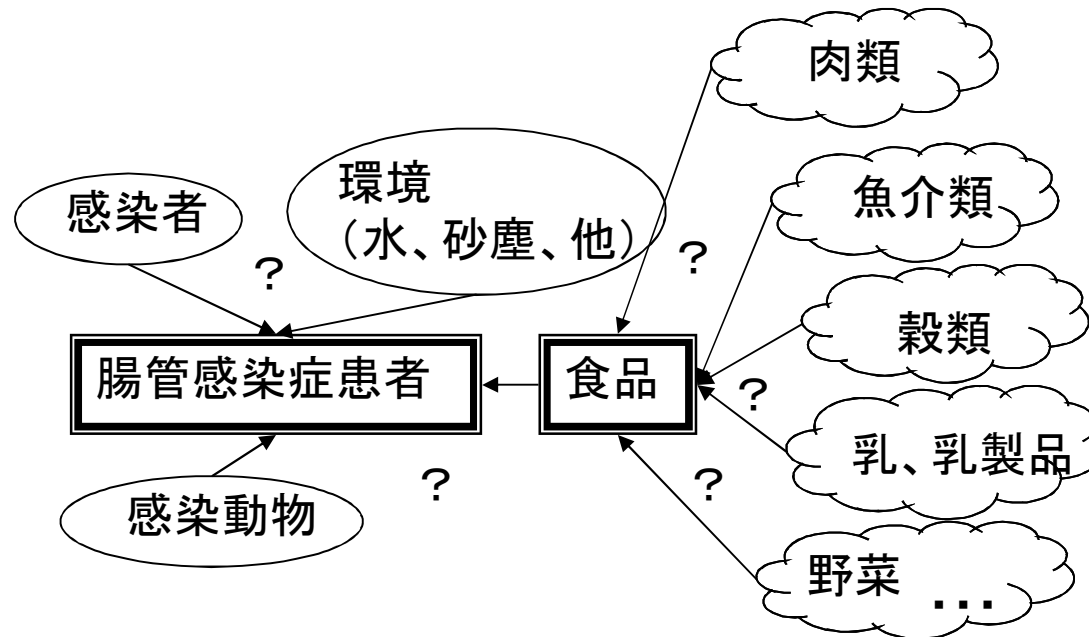
腸管出血性大腸菌O157 散発例のリスクおよび発生動向

薬事・食品衛生審議会食品衛生分科会食中毒部会
2014年3月24日(月)

国立感染症研究所感染症疫学センター
八幡裕一郎

腸管出血性大腸菌O157散発例の リスク推定

背景：散発患者発生の原因



- 食品媒介なのか、動物との接触によるのか、他の患者さんからの感染なのか、わからない
- 食品媒介であることがわかって、原因食品は、すぐにはわからない

目的

- 国内における腸管出血性大腸菌O157感染症の散発例の原因について検討
 - オッズ比の算出
- 原因のうち、優先順位について検討
 - 人口寄与危険割合 (Population Attributable Risk %: PAR%) の算出

対象と方法

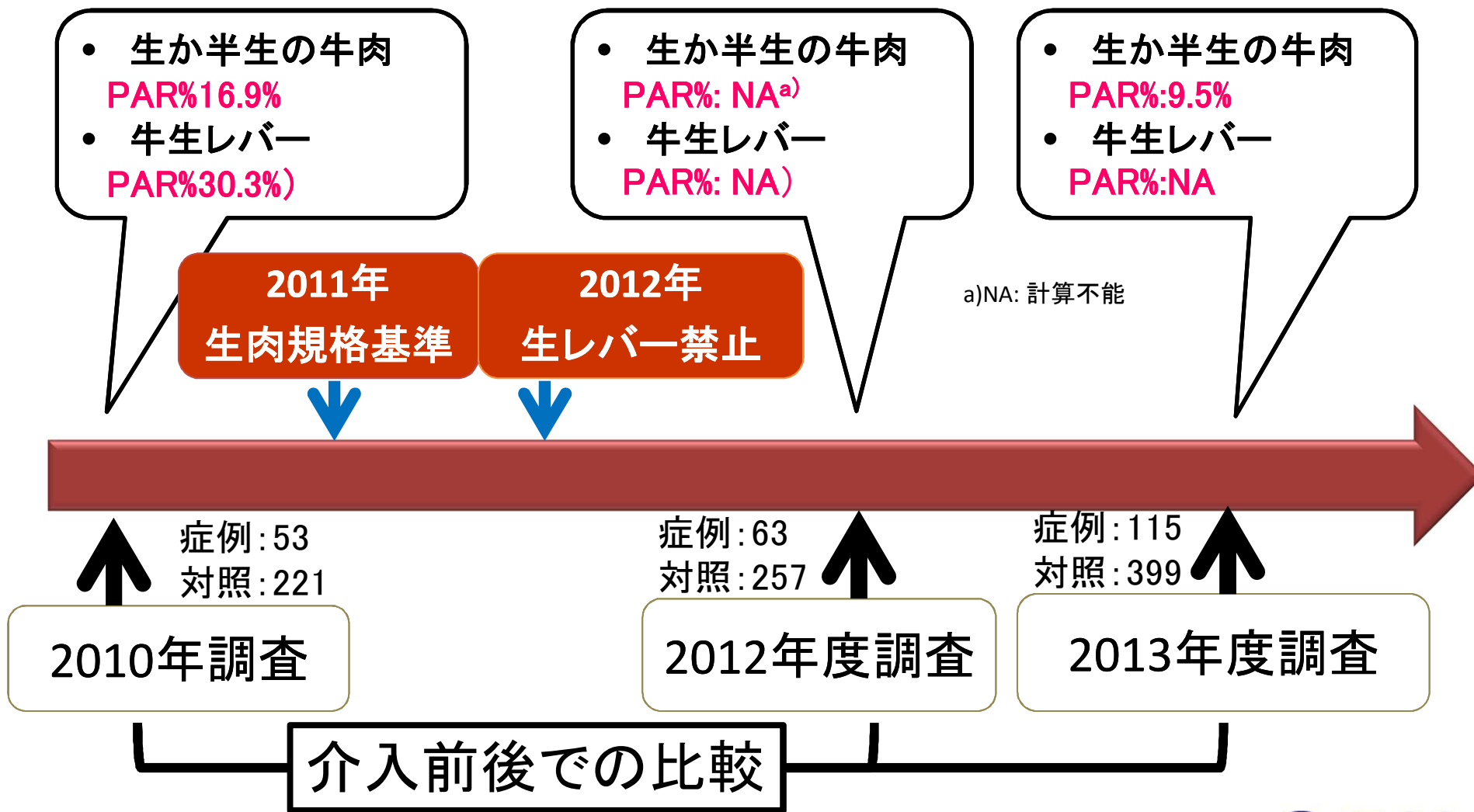
- 研究デザイン: マatchingした症例対照研究
- 対象: 8自治体(都、県、市)
 - 症例:
 - 急性の消化器症状(下痢、血便、腹痛、嘔吐)のうち1つ以上の症状を呈し、腸管出血性大腸菌が検出された者(ただし、散发例のみ)
 - 対照:
 - 居住地域(郵便番号上3桁)、性別、年齢でマatching(症例:対照=1:5)
 - 消化器症状を呈さない者のデータ収集: 標準調査票(調査項目: 属性、喫食、環境との接触、動物との接触等)
- 調査方法: 保健所担当者による調査(症例)、インターネット(対照)
- 統計解析: 条件付きロジスティック回帰分析

牛肉の喫食(暫定値)

	2010年			2012年			2013年		
	OR	95% CI		OR	95%CI		OR	95%CI	
生または半生									
牛肉	13.25	4.41	- 39.83	1.64	0.39	- 6.93	12.57	3.47	- 45.48
牛挽肉	1.45	0.20	- 10.37	4.16	0.58	- 29.88	1.48	0.11	- 20.27
牛レバー	28.20	3.03	- ∞	NA			9.19	0.90	- 93.51
十分加熱									
牛肉	1.60	0.94	- 2.73	2.10	1.13	- 3.91	1.87	1.17	- 3.00
牛挽肉	1.11	0.99	- 1.24	1.78	0.87	- 3.65	0.96	0.49	- 1.87
内臓牛肉	1.76	0.65	- 4.72	4.44	1.40	- 14.08	4.92	1.98	- 12.24

生肉の規格基準・生レバー禁止

前(2010年)と後(2012年・2013年)のリスク比較(暫定値)



腸管出血性大腸菌O157散発例 の発生状況

方法

- 腸管出血性大腸菌感染症の発生動向

- 感染症発生動向調査(NESID):2007年第1週～2012年第52週(2013年1月8日時点)、ただし下記を満たす場合は除外

- ① 病原体情報
 - ② 患者登録情報
- } より10例以上症例報告された集団発生事例

- 感染源・感染経路の検討方法

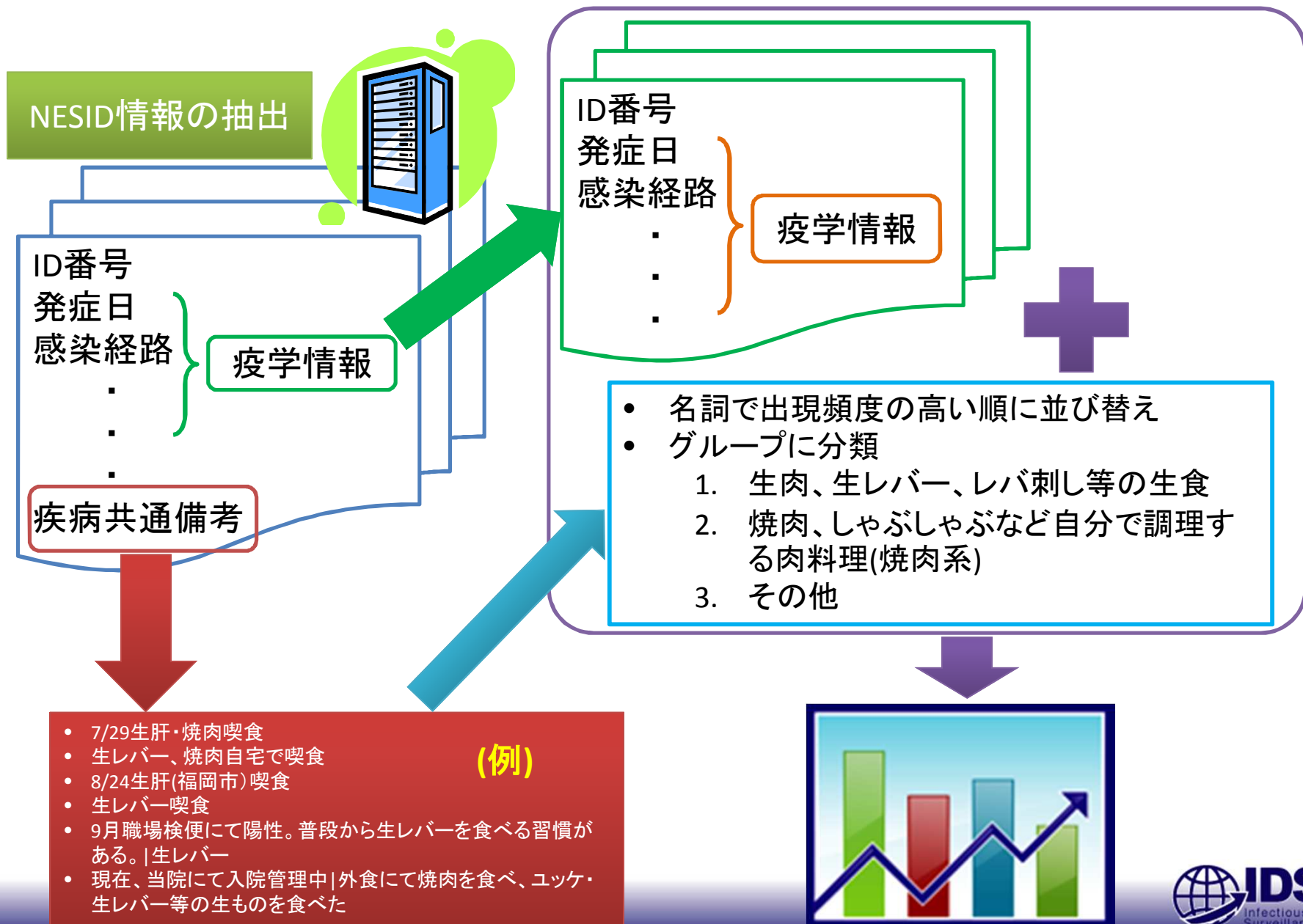
- NESIDの「その他備考」等に記載された文字情報利用

- 届出に記載された名詞(キーワードセット)の分類

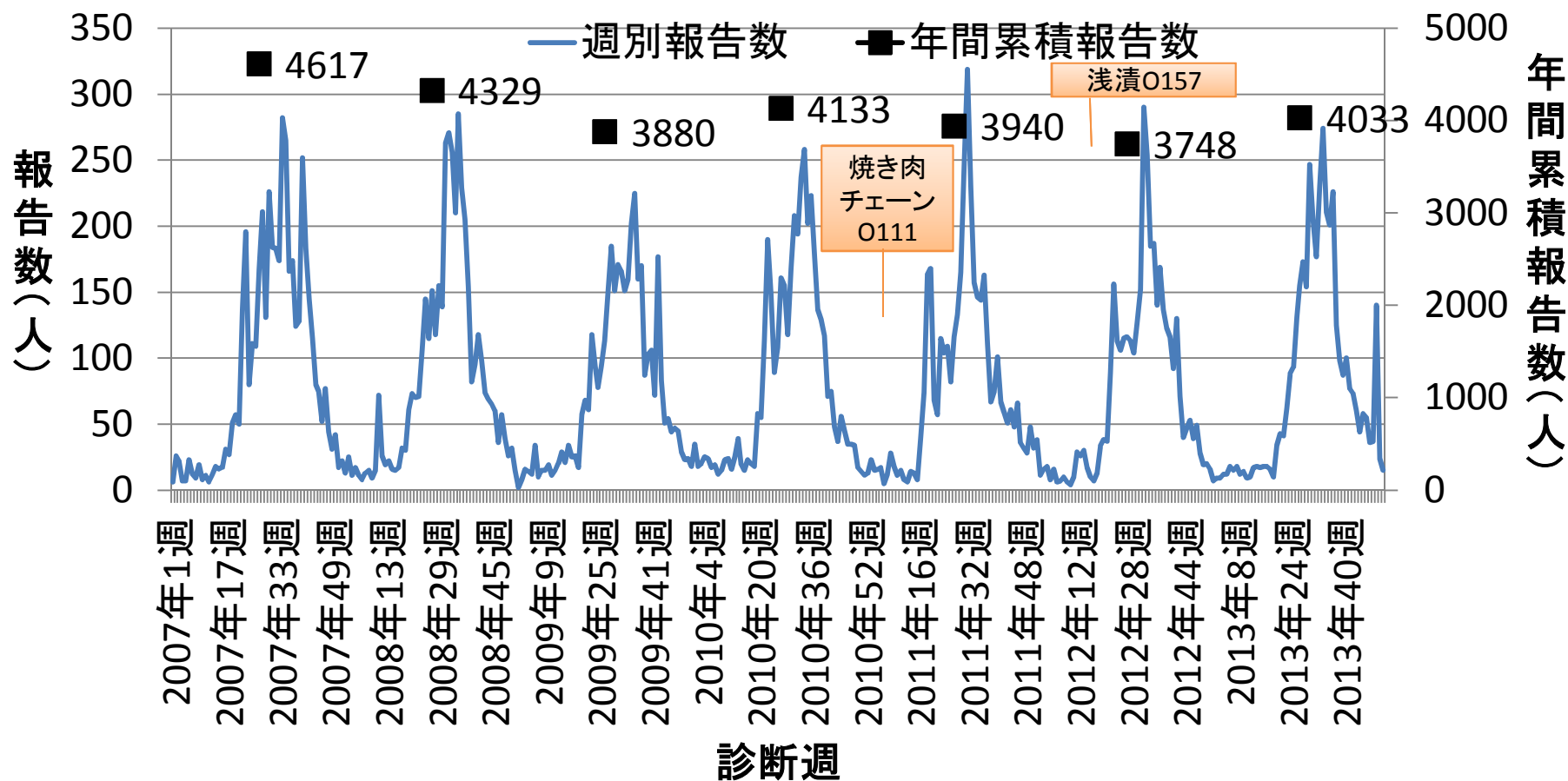
- ① 生肉・生レバー喫食の記載あり
- ② 焼肉・バーベキュー等(以下焼肉系)の喫食のみ記載あり
- ③ その他

- 「ユッケは食べていない」等の否定表現を含む記述:各カテゴリーから除外

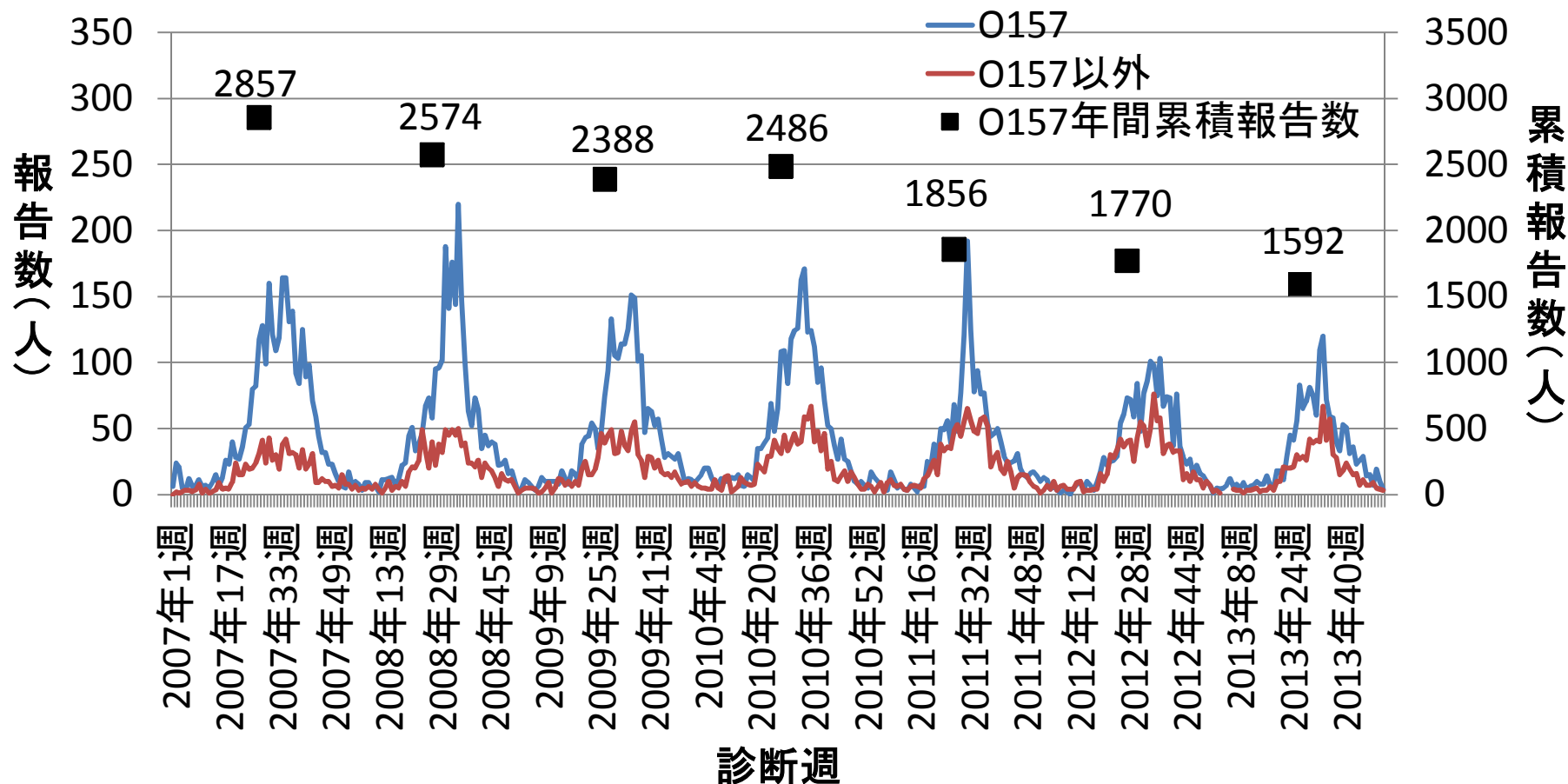
感染源・感染経路に関する情報の分析フロー



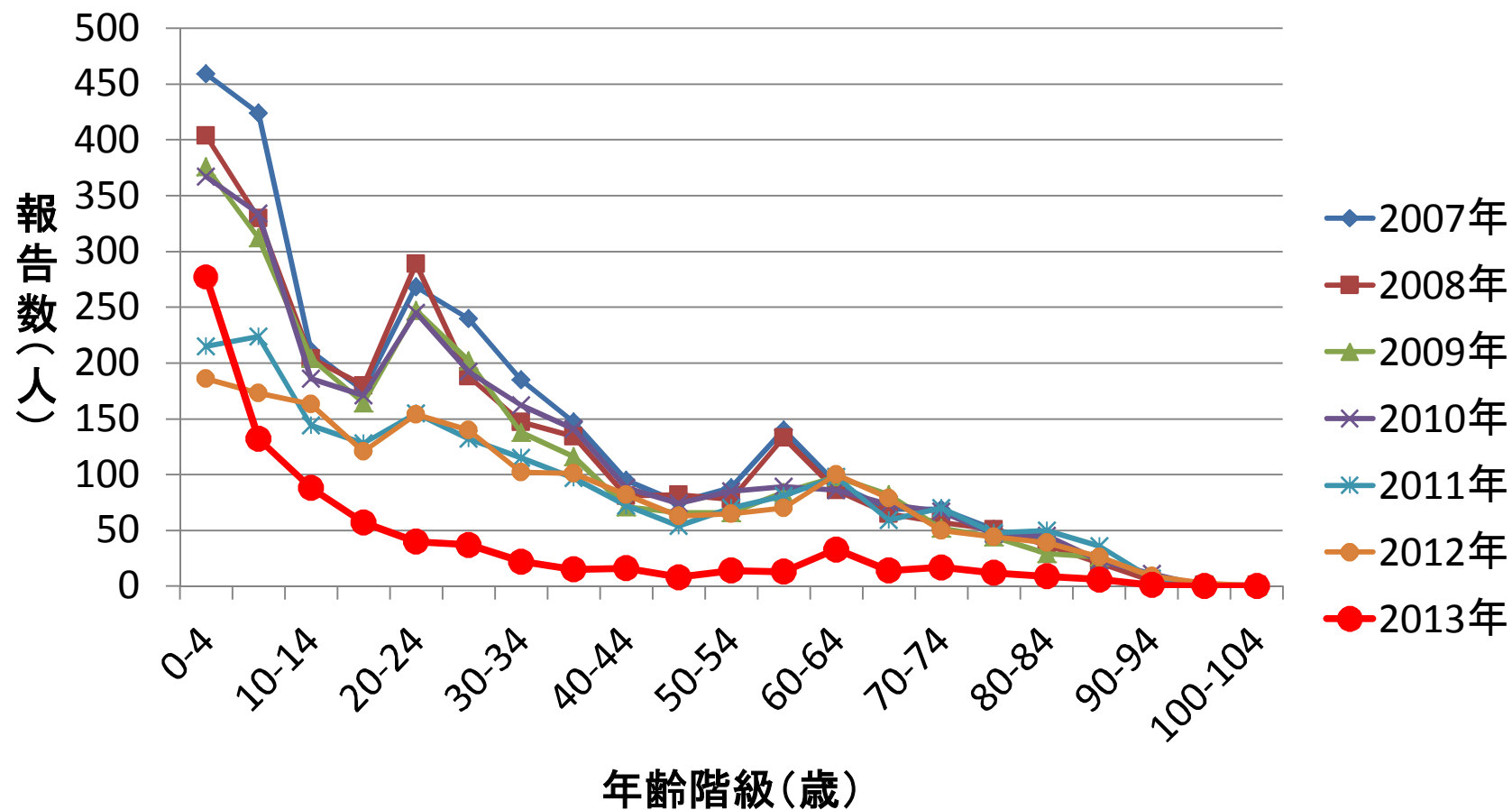
週別腸管出血性大腸菌感染症報告数 2007～2013年(暫定値)



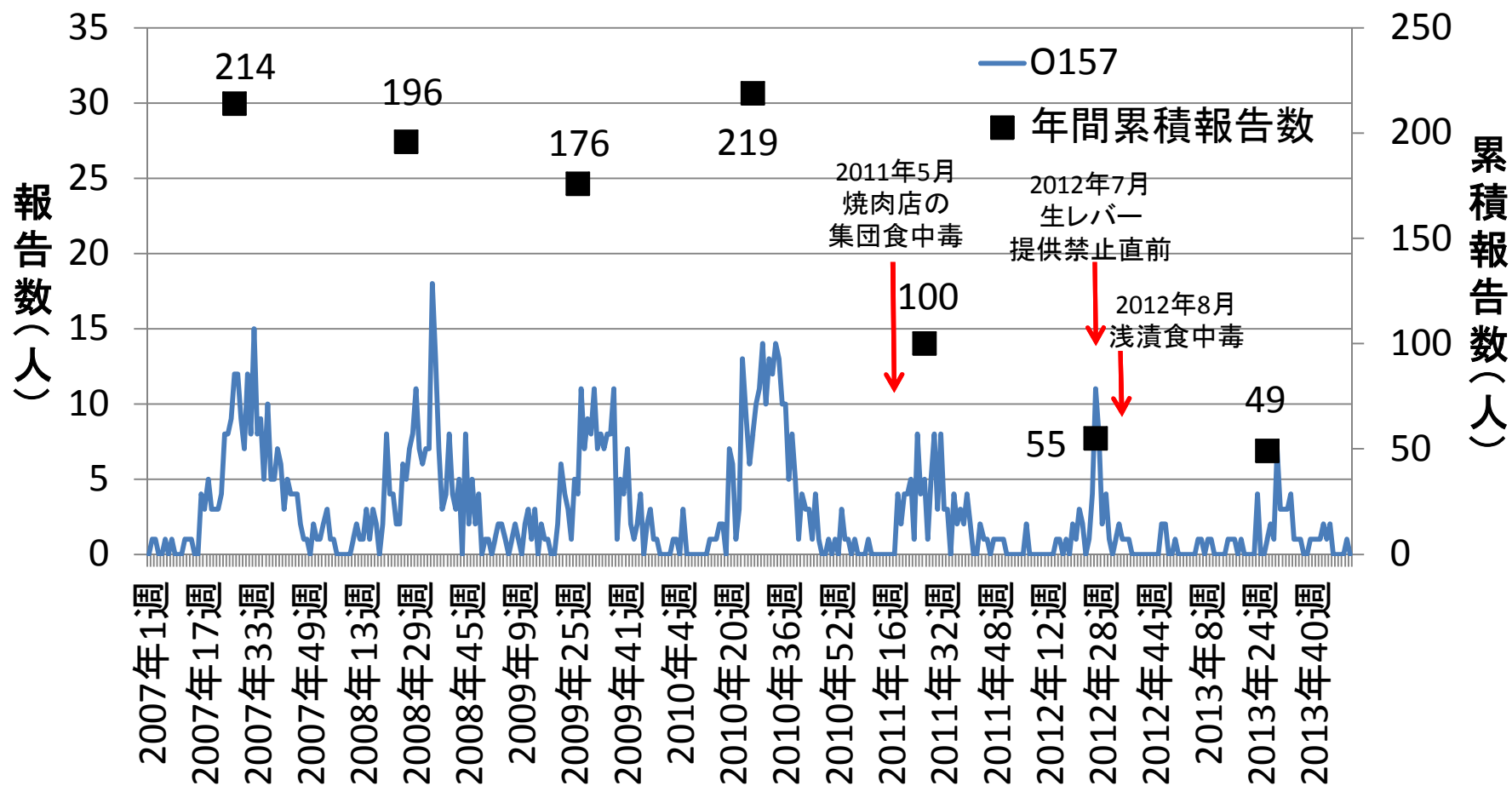
週別腸管出血性大腸菌報告数・累積報告数 (有症状者のみ・集団発生除く、2007-2013年；暫定値)



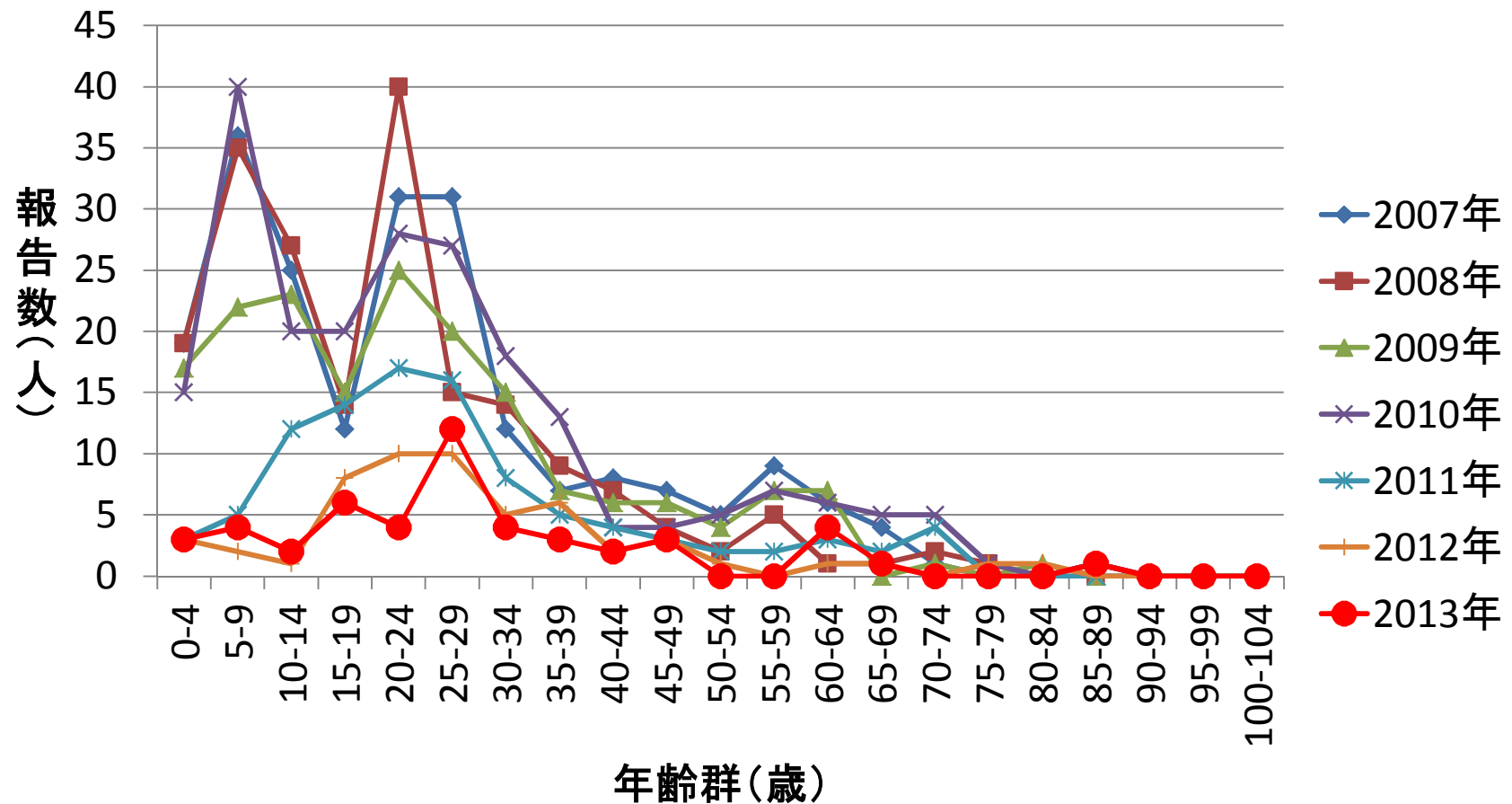
年齢群・診断年別腸管出血性大腸菌O157報告数 (有症者のみ・集団発生除く、2007-2013年；暫定値)



週別・腸管出血性大腸菌O157感染症報告数・累積報告数(有症者のみ・集団発生除く、2007-2013年；暫定値) 生肉または生レバーの記載あり



年別・年齢群別腸管出血性大腸菌O157感染症報告数 (有症状者のみ・集団発生除く、2007-2013年; 暫定値) 生肉または生レバーの記載あり



まとめ

- リスクの検討：生肉の規格基準および生レバー禁止後
 - 生か半生の牛肉の喫食がリスクとして再び算出
 - 生レバーは有意なリスクではなかったが、数例喫食者が存在
→ 牛生肉・生レバーの喫食が腸管出血性大腸菌O157の感染リスクが高いことに関する知識や認識の普及が必要
- 腸管出血性大腸菌O157の発生動向
 - 患者（有症状者）報告数：対策後（2011-2013年）は減少
 - 集団発生を除いたO157を原因とする腸管出血性大腸菌感染症の患者（有症状者）報告数検討
 - 0-4歳（2013年）を除き大きく減少した
 - 生肉・生レバー喫食のある報告は対策後減少は顕著であった